



Title	自己は記憶によってつくられる : 出来事を記憶し語ることの発達
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	児童心理, 56(7), 710-715
Issue Date	2002-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/44695">http://hdl.handle.net/2115/44695</a>
Type	article
Note	新連載・しんりがく 最新研究
File Information	JS56-7_710-715.pdf



[Instructions for use](#)

# 自己は記憶によつて つくられる

——出来事を記憶し語ることの発達

保育所で保護者向けに話をしたり、あるお母さんが次のような質問をされた。

「娘が四歳のころ、私たちは仕事でオランダに住んでいました。この体験はとても貴重なので、娘にずっと覚えておいてほしいのですが、どうすればよいでしょう」

一般に、三歳より前の記憶を大人になって想起することとは困難であり（これを幼児期健忘という）、四、五歳の記憶ですら覚えていない人も多い。たとえ覚えていたとしても断片的であり、誤りも多いようだ。「折にふれてオランダのことを話題にしたり、アルバムを見るなどして日々思い出すようにしてみてもはどうでしょう」と、当たり前のようなことを、四苦八苦で答えた記憶があ

る。

自己は記憶の寄せ集めではないが、体験や思い出が自己の一部となることは、間違いない。人はどのようにして体験や思い出を記憶し、自己の一部としていくのだろうか。本稿では、子どもは出来事の記憶をいつごろから記憶するようになるのか、それはどのように発達するのか、そして子どもころの記憶はどのように保持されていくのかを、最新の研究成果を交えながら考察したい。

子どもはいつごろから体験を語るようになるのか

むずがっている新生児に母親の体内で聞こえていた心

東京都立大学助教授

なか まきこ  
仲 真紀子

臍音や血流音を聞かせると、すやすやと眠り始めるという。新生児であっても、以前体験したことを保持する能力はあるといえるだろう。しかし、新生児は「これはお母さんのお腹の中で聞こえていた音だ!」という再現感を他者に伝えることはできない。音を聞いて眠ってしまったその行動から、私たちは「赤ん坊は、胎内での音を覚えていたのだろう」と推測することしかできない。

では、幼児はいつごろから出来事を語り始めるのだろうか。ネルソンは、幼児は二歳ごろから自発的に日常の出来事について話すようになるという(と)。ただし、最初のうちは「荷物をもって飛行場に行った」というような過去の特定の体験を語るのではなく、「飛行場に行くときには荷物を持って行く」といった一般的な事象の流れを語るのだという(このような一般的な事象の流れをルーチンと呼ぶ)。「飯の後でデザートを食べた」ではなく、「飯の後にはデザートを食べる」「保育園で紙芝居を見た」ではなく、「保育園では紙芝居を見る」という具合である。出来事の記憶を保持するには、まずルーチンの知識が必要だとネルソンは述べている。

出来事の記憶には、ルーチンだけでなく、それがいつ起きたかという時間の特定も必要である。しかし、岩淵

## 最新研究 しんりがく

と村井の調査によれば、「きのう」や「おととい」といった過去を表す言葉の習得には時間がかかる。「きのう」の使用は四歳でも六割程度であり、「おととい」の使用は六歳児であってもおぼつかない(と)。私の育児ノートにも、娘が四歳のころの次のようなやりとりがある。

子「この前、山田さんの家に行った」

母「きのうでしょ?」

子「違う。きのう起きて、寝て(昼寝?)また起きたから、竹山さんの家に行ったのはこの前」

\*

子「今日四月?」

母「九月」

子「へんだね!、この前八月だったのに今日は四月なんて」

母「今は九月」

過去形を表す言葉が用いられてはいるが、かなりシュールな会話である。

さらに、過去を語るには「実際にあったことを話さなければならぬ」ということが理解されなければならぬ

い。上原は、幼児の記憶の発達を二歳から四歳まで縦断的に調べている(3)。この研究でも、子どもは二歳ころから過去の出来事を語り始めている。しかし、初期の語りは断片的であり、公園に「くじらがいた」と言ったり(三歳十か月)、行ったことのない場所の写真をもつてきて「自分が行った」と報告する(三歳一か月)など、非現実的な「過去」も多い。

岡本は、絵本に出てくる「青いおうち」が大好きな(岡本氏の)娘さんが、二歳の終わりごろ、「森の奥の青いお家に行った」と報告したと書いている(4)。青いおうち(これはやがて赤いお家になるのだが)には、なんともう一人の「やさしい」お母さんがいて、「アイス食べてもいいって言った」とのことであった。「…した」という過去形を用いながらも、過去の出来事を話っているわけではない時期があるらしい。

幼児は二歳から三歳にかけて出来事を語るようになる。しかし、それが「過去の出来事」として成立するには、出来事の一般的な流れがわかり、過去を表現する言葉を学び、事実を話さなければならないことを理解する必要がある。

### 体験の記憶はどのように発達するのか

子「ママ、クライスラービル」

母「クライスラービル？」

母「クライスラービルに誰がいるか知ってる？」

子「パパ」

母「あそこに行ったことある？」

子「行った……パパ、お仕事に行った」

母「そう、パパの所に行ったことあるよね。エレベーターに乗って上の方までのぼって、大きなお窓から

下が見えたでしょ。……大きなビル。面白かった？」

これは二歳児と母親の対話である(5)。子どもが発した「クライスラービル」の一言を、母親は拡張し、新たな情報を加え、「面白かった？」と評価している。このような過去の出来事をめぐる対話(メモリートークとも言う)は、子どもの記憶に影響を及ぼす。子どもは対話することで、過去の出来事を記憶し語ることに意味があると気付く、出来事の流れに注意を払うようになるだろう。また、養育者が「いつ? どこで?」と詳細を尋ね

れば、子どもは過去を語るのに必要な情報(いつ、どこで、誰が、何を、どうした、どう感じた)を理解するようになるかもしれない。事実、出来事の流れを重視する母親の子どもは、そうでない母親の子どもに比べ、出来事をより多く語る事が知られている(5)。

養育者といえは「母親」だけを想像しがちだが、父親の存在も重要である。金と筆者は、最近中国人の親子のメモリートークを調べた。同じ子どもから話を聞き出すのでも、父親が尋ねる場合と母親が尋ねる場合とは、話の引き出し方が異なる。母親はあっさり概要を尋ねるが、父親は念入りに聞きだし、「ちゃんと話して」などのしつけも行う(6)。子どもは複数の人たちと過去を分かち合う体験をしながら、何をどのように記憶し、話せばよいかを学んでいくといえるだろう。

子どもの年齢が高くなれば、保育園や幼稚園の教師の役割が大きくなる。藤崎は、子どもが他の園児の前で休日の体験などを話す「生活発表」を取り上げ、保育者の働きかけについて調べている(7)。その結果、子どもの年齢が上がるほど、保育者による質問(「何したの? それはいつ?」)は減り、子どもは自発的に体験を語れるようになっていた。また、保育者は年少児に対しては

## 最新研究 しんりがく

「何したの?」と、どんなトピックでもよいから話すよう促すのに対し、年長児には「おでかけた?」など、皆の前で語るのにふさわしい出来事を選んで話すよう促していた。ここでもまた、子どもはどのような出来事をものように記憶し、話せばよいかを学ぶ。

では、その後はどうか。私は、出来事の記憶の教育は、作文教育に受け継がれるのではないかと思う。低学年の児童の作文は「朝起きました。お母さんがお弁当を作ってくれました。バスに乗って遠足に行きました。

……」と、出来事がえんえんと綴られることが多い。このようなとき、教師は「心に残ったことを選んで書いてね」と指導するだろう。また、「お家に着きました。おしまい」といった作文には「気持ちを書きましょう」とコメントするかもしれない。このようにして、子どもは人と分かつべき思い出をいかに表現するかというスキルをさらに洗練させていくのだと思われる。

ただし、過去の出来事を話すことと書くことは、必ずしも同じではないかもしれない。記憶に関する米国内の調査資料を見ると、大人も子どもも過去の出来事について、事実(正確かどうかは別として)を具体的にたくさん語っている。これに対し、アジア圏の大人や子ども

の研究では、ルーチン的で抽象的な内容が控えめに語られることが多いようだ。人前で自己宣伝が求められる米國と、奥ゆかしさを重んじる日本という文化的な要因も背後にあるのかもしれない。文化差は発達差とともに、人がどのように過去を語るようになるかというプロセスに、光を当ててくれる。

### 体験はどのように自己へと織り込まれるか

体験がどのように記憶に残り、自己の記憶(自伝的記憶とも言う)へと体制化されるかは興味深い問題である。ここでは、過去の体験が時間を経てどのように想起されるのかを調べた研究を、二件紹介しよう。昨年、夏、国際記憶会議で報告されたホットな研究である。

セイルズらは、九二年にフロリダを襲ったハリケーンの体験について、被害当時と九八年の二度、母子を対象に調査を行っている。調査は面接によるもので、子どもの年齢は被害当時は三、四歳、二度めの調査時は九、十歳であった。一度めの調査をもとに、母子をストレスの低い群、中くらいの群、高い群に分け、それぞれ①嵐の前(窓を打ち付ける)、②嵐の最中(嵐の音)、③嵐の後(後片付け)の記憶がどのように変化するかを調

べた。

その結果、九二年当時の子どもの記憶は、①、②、③のどの場面においてもストレス低群か中群の記憶が高く、ストレス高群の記憶は少なかった。しかし九八年の調査では、①と③については三群の差がなくなり、②の嵐の最中の記憶はストレス高群でもっとも高くなった。二度の調査における記憶の一貫性も、ストレス高群が高い。

ストレスの高い群は、嵐の出来事を詳細まで覚えることができなかったのかもしれない。あるいは、覚えていても、被害当時は言葉にできなかったのかもしれない。しかし、時間を経ることで記憶が整理され、また対話や報道を通して情報が補われるなどし、生活に大きな影響を及ぼしたハリケーンについての一貫した記憶が作られたのだと推測できる。

パウワーらも、九八年にミネソタ州で起きた竜巻きの体験について、災害の四か月後と十か月後の二度、調査を行っている。三十組の母子に、①災害のこと、②災害とは関係ない災害前の出来事、③災害とは関係ない災害後の出来事について対話を求め、その内容を時間情報、文脈情報、知覚情報(見えた、聞こえた)、認知情

報(考えた、思った)、負の感情、正の感情、生理的情報(眠たい、疲れた)等にカテゴリー分けし、①、②、③ごとにカウントした。

その結果、正の感情と生理的情報を除くすべてのカテゴリーにおいて、四か月後も十か月後も、①の災害時の情報②や③の關係ない出来事の情報よりも多かった。しかも十か月後では「考えた、思った」などの認知的な情報が増加し、セイルズらの研究と同様、記憶が吟味され、整理されていく様子がうかがわれた。

個別の出来事がどのように保持されるのかを調べた研究はまだ少なく、その内容もストレスの高い出来事や感情がまつわる出来事の記憶が中心である。だが、ありふれた出来事も含め、私たちがどのように記憶を保持し、個人内、個人間で精緻化し、自伝的記憶として蓄えていくかは、自己の成り立ちを知る上でたいへん興味深い問題である。さらなる研究の発展が望まれる。

【文献】

(1) Nelson, K. Events, narratives, memory: What develops? In C. A. Nelson (Ed.) *Memory and affect in development: The Minnesota symposia on child psychology*, 26, 1-24. NJ: LEA 1993

しんりがく **最新研究**

- (2) 岩淵悦太郎・村石昭三『用例集 幼児の用語』日本放送出版協会、一九七六(高橋道子ほか著『子どもの発達心理学』新曜社、一九九三より)
- (3) 上原泉「再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の關係——縦断的調査による事例報告」『教育心理学研究』四六、二七一—二七九頁、一九九八。
- (4) 岡本依子「森のおくの赤いおうち」『ほうむたうん』二〇〇一年六月二十五日号
- (5) 仲真紀子「出来事の想起とコミュニケーション」日本児童研究所(編)『児童心理学の進歩』二〇〇〇年度版、七九—一〇二頁、金子書房、二〇〇〇
- (6) 金敬愛・仲真紀子「母親と父親は幼児の出来事語りをどう引き出すか」(投稿中)
- (7) 藤崎春代「保育者は幼児の過去経験物語りをどのように援助するのか?」『帝京大学文学部紀要』四、四一—六四頁、一九九七
- (8) Sales, J., Goldberg, A., Fivush, R., Bahrick, L., & Parker, J. F. Children's recall of natural disaster after a six year delay. *ICOM3*, p. 69. 2001
- (9) Bauer, P. A., Van Abben, D., & Ackil, J. A storm of memories: Children's and adults' recollections of a devastating tornado. *ICOM3*, p. 69. 2001